

近代以降の日韓語彙交流

－ 日本人が直接伝えた日本の漢語 －

李 漢 燮*

차례

- 1.はじめに
2. 19世紀末における日韓の語彙交流の背景
3. 『漢城旬報』について
4. 『漢城旬報』に受け入れられた日本語
5. 終わりに

1.はじめに

本稿は、1880年代における韓国語と日本語の語彙の交流問題について考えてみるものである。韓国・中国・日本など東洋三國では、古くから語彙の交流が盛んに行われたということは周知のことであるが、19世紀半ば以降も語彙の交流は活発に行われたと思われる。19世紀半ば以降、東洋三國では近代化に伴い、各種の制度や社会体制、學問などが西洋化が進み、多くの新しい語彙が生まれるようになる。この時期に成立した近代語は他の國にも受け入れられ、互いに近代語の成立に影響したということは知られている。例えば、中國で新しく成立した語彙が日本語や韓国語に導入され、また日本で作られた譯語が韓国語や中國語に入るようになったのがそれである。

本稿では、近代以降東洋三國の語彙の交流のうち、韓国語と日本語の交流の問題について考えてみたいと思う。日韓兩國では昔からいろいろな交流が行われたが、語彙の面も例外ではなかったと思われる。日本の語源辭典では、古いことばの語源を韓

* 고려대학교

國語に求めるものが少なくないが、これは日韓兩語の語彙の交流がなされてきたという一つの証據になると思われる。ところが、19世紀半ば以降は、日本で新しく成立した近代語が韓國語に受け入れられることが多く、近代以降100年以上経った現在では、多くの日本語の語彙が韓國語に入るようになったという結果に至っている。これには日本の植民地支配などの影響が主な原因であろうが、近代以降の韓國語への日本語の語彙の導入は開港直後まで遡る。

筆者は、最近発表した論文で、19世紀末韓國語に日本語の語彙を受け入れた主体として次の三つをあげたことがある。¹⁾

- ①日本を往來した外交官
- ②日本に留學した留學生
- ③日本へ政治的に亡命した人

本稿では、これらの主体に加えて、④日本人が韓國に來て直接日本語の語彙を伝えた例を問題にすることにする。今回問題にするのは井上角五郎という人物で、1883年から1886年まで約4年間韓國に滞在しながら、『漢城旬報』や『漢城周報』の記者として活躍し、当時の日本語の語彙を韓國に多く伝えた人物である。ここでは『漢城旬報』を対象にし、『漢城旬報』で井上角五郎が紹介した日本語の語彙について見てみることにする。

2. 19世紀末における日韓の語彙交流の背景

ここでは本題に入る前に、19世紀末に日韓兩語の間に語彙の交流が行われた背景について考えてみることにする。この時期に日韓兩語の間に語彙交流が行われるようになったのには、次のような背景があったと思われる。

まず、言えることは、当時日本を訪問した韓國政府の外交使節が日本語を韓國語に紹介することがあったということである。開港以降日本を訪問した韓國の外交使節は1876年の金綺秀から始まり、以降政治的な問題が多發することにより、かなりの数の外交使節が日本を訪問している。日本を訪問した外交官は、歸國後必ず報告

書を出すことになっている。實はこれらの報告書に日本語が多く紹介されていたのである。²⁾

次にあげられることは、日本に亡命した政治家による日本語の流入である。19世紀末韓国では、「閔妃弑害事件」や「甲申政変」、「俄館播遷」などの政治的事件に関わった、多くの人が日本に亡命している。彼らは政治的に問題がなくなると歸國し、一部は官職に復歸したり、啓蒙活動をするのであるが、筆者はこれら亡命者による日本語の流入も少なくなかっただろうと考えている。

三つ目に、日本語を韓国語に持ち込んだのは何と言っても日本へ留學した韓國人留學生である。韓國人の日本留學は1881年から始まる。最初に日本に留學した人は兪吉濬、柳定秀、尹致昊の3人で、朴己煥(1998)の研究によれば、1881年から1884年までに日本に留學した韓國人は67名であったという³⁾。1990年までには500人近い韓國人が日本に留學したと推定される。留學から歸った人の多くは官吏となるのであるが、一部は新聞を出したり、學校を立てるなど啓蒙活動家として活躍した。これらの留學生の歸國後の活動の過程で日本語が紹介されることが多かったと思われる。

四つ目にあげられることは、当時韓国に招聘された日本人の顧問、技術者、教官、日本語教師、技術者などの役割である。1880年代以降、朝鮮政府では近代的軍隊や警察を養成するのに日本人を招聘することがあり、1890年代以降は日本語學校が増えるにつれ、日本語の教師を招聘することもよくあった。本稿で問題にする井上角五郎という人物は新聞の發刊のために招聘された人だったのである。日本から招聘された人たちは、文明開化の現場で韓國人と直接接触したので、彼らによる影響も少なくないと思われる。

最後にあげられることは、1880年代以降韓国に居住する日本人が増えたといことである。資料1を見ると、戦前まで韓国に居住していた日本人は1884年に4,356人、1904年に31,093人、1911年にはすでに210,989人に達しており、当時朝鮮に来ていた日本人が急速に増えていったということが分かる。これだけ日本人が多くなると、韓國人との接触も増えたであろうし、韓國人と日本人が直接接触することにより、日本語は韓国に紹介されることが多かっただろうと思われる。

本稿ではこれらのうち、『漢城旬報』という新聞の發刊に招聘された井上角五郎という人物と關連する問題について考えてみたい。

3. 『漢城旬報』について

(1) 『漢城旬報』の發刊について

『漢城旬報』は、1983年10月31日（陽曆）に創刊された韓國最初の近代的新聞で、1984年12月の廢刊まで40号まで出されたと知られている。これまで見付かったのは36号までである。日本から輸入した活版印刷機で印刷されており（第5号までは紙も日本から改良紙を輸入して使った）、文章は純漢文であった。大きさは9×24cmの冊子型⁴⁾で、面数は18面になっている。發刊の目的は、國民に世界の情勢を理解させ、また先進諸國の政治や經濟、地理などを紹介する事にあった。

『漢城旬報』については先行の研究に詳しいので、ここでは新聞を出すことになった経緯を中心に述べることにする。『漢城旬報』は、創刊の話が出たきっかけや準備過程、または實際の新聞の發行過程などを見たとき、日本との關連が深かったかのように思われる。『漢城旬報』の創刊の話が出たのは、1882年「修信使」として日本に行った朴泳孝と福澤諭吉の出会いから始まったと言われている。この時朴泳孝は福澤諭吉に、朝鮮の開化のためにはまず何をすべきかと聞いたという。この質問に對して福澤諭吉は、若者を先進諸國に留學させることと新聞を出すことを進めた。またその場で福澤諭吉は朝鮮での新聞發行を手助けする人として、井上角五郎、牛場卓造、高橋正信など五人の日本人を朴泳孝に推薦した。彼らはすべて慶應義塾の卒業生で、福澤の自宅に泊まっていた書生であった。福澤諭吉は1882年3月、自ら『時事新報』という新聞を出すのであるが、新聞の重要性を現場で気づいた朴泳孝は歸國後、高宗に新聞發刊の必要性を訴えるよになる。朴泳孝は高宗の婿であったこともあり、政治的に力を持っていた人であったと思われる。このような事情が影響したのか、同年2月28日國王から新聞發行の許可が降りた。朴泳孝は新聞の發刊の實務を兪吉濬に任せ、日本から招聘された牛場卓造や井上角五郎、高橋正信なども新聞を出す準備を手伝った。当時朝鮮ではいわゆる保守派と開化派が對立していたのだが、保守派は朴泳孝などの急進開化派の動きに不安を感じて、國王に働きかけて朴泳孝を地方の官吏（廣州留守）に左遷させてしまう。これに失望した兪吉濬も役職を辭め、新聞の發行準備は途中で中斷してしまう羽目になる。身の危険を感じた牛場

卓造や高橋正信らは日本に歸國し、井上角五郎のみがソウルに残る。一時新聞の發刊は無理かと見えたが、金允植を中心とした穩健な開化派の努力で新聞を發刊する準備は再びスタートした。それから同年10月31日『漢城旬報』は發刊されるに至ったのである。井上角五郎は正式に朝鮮の政府に雇われ、新聞社の記者として、新聞の發刊に参加する。

(2) 『漢城旬報』の記事の性格

『漢城旬報』の記事の性格については、朴正圭(1983)、安春根(1984)、鄭晉錫(1983)、崔俊(1969)などに詳しい研究がある。ここでは先行の研究を参考にしながら本稿と関連のある内容を中心に紹介することにする。まず、新聞の構成について見てみると、基本的には記事を國內ニュース（「内國紀事」、「國內官報」、「國內私報」（今日の社會面に当る））と國外ニュース（「各國近事」）に分けて掲載している。國內のニュース欄には、國王の命令や中央と地方の官廳からの報告、官吏の任免、物価の変動などが収録されている。例えば、第1号の記事を見ると、國內のニュースとして、「諭旨恭錄」「議政府啓」「慶監狀啓」「勅諭恭錄」「三港監理」「二陵幸行」「雜誌」「市直探報」(物価調査) など15件の記事が載っている。國外のニュースを扱う「各國近事」は主に外國の新聞の記事を取材源にしている。例えば、1号の國外記事を紹介すると、「安南事起源」(上海新報曰)、「馬達加斯加島事件近報」(ソース不明記)、「安南与法人議和」(上海新報曰)、「地球図解」「地球論」「論洲洋」など15件の記事が載っている。このうち「地球図解」「地球論」「論洲洋」など三つの記事は啓蒙的な読み物であり、外國の雑誌や單行本から持ってきたと推定される。

<表-1> 『漢城旬報』の記事比率

國內官報	國內私報	各國近事	読み物	本局廣告	計
336	71	1,019	127	4	1,557
21.6%	4.6%	65.4%	8.2%	0.26%	100%

<表-2> 『漢城旬報』の外信ニュース源

中國の新聞	日本の新聞	その他の國の新聞	ソース不明
568	156	93	202

中國の新聞：上海申報244件(申報も含む)、滬報100件、循環報60件、中外新報59件、時報30件、上海報17件、香港西字報16件など

日本の新聞：日本報67件、官報32件、時事新報15件、鹿兒島6件、報知新聞6件、東京日日5件など

(3) 『漢城旬報』の發刊に關わった井上角五郎

井上角五郎は、1860年(万延元年)10月18日廣島縣野上村生まれで、1879年(明治12年)に上京し、慶應義塾に入學する⁵⁾。福澤諭吉の書生となり、1882年(明治15年、当時23歳)慶應義塾を卒業する。書生として福澤家にいた頃、同じく福澤の家に寝泊まりしていた朝鮮國最初の留學生俞吉濬と知り合い、1883年1月朴泳孝に付き添い韓國に來るようになる(当時24歳)。この時一緒に來韓した牛場託造や高橋正信などは、同じく福澤諭吉の家の書生であった人である。福澤諭吉は1882年から『時事新報』という新聞を出すわけであるが、井上角五郎らの書生たちは『時事新報』の發刊にも關わっていたので、朝鮮での新聞發行に際しても力になれると判断したからであろう。來韓後、韓國政府に雇われ、博文局で『漢城旬報』を出すのに重要な役割を担当した⁶⁾。

『漢城旬報』を出した博文局のスタッフは、「主事」金寅植、「司事」張博、吳容然、金基俊、「主宰」井上角五郎の五人であった。印刷機は苧洞(現在の乙支路2街186番地当り)の井上角五郎が泊まっていた場所に設置し、ここで新聞を印刷した。

井上角五郎は新聞の編集を担当し、特に外國の新聞を翻譯する翻譯者として活躍した。日本關係のニュース源はほとんど井上によって翻譯されたと言われている。また、井上は翻譯だけではなく、韓國人に開化を啓蒙する讀み物を外國の單行本などから翻譯して掲載している。これに當る記事としては次のようなものがある。

地球図解、地球論、論洲洋(1号)、論地球運轉、歐羅巴州(2号)、會社説、亞米利加洲(3号)、論電氣、亞非利駕洲(4号)、日本史略、阿西亞尼亞洲(5号)、論華人三与致富、英國誌略(6号)、英人演説、太西法律(7号)、地球圖日図解、歐羅巴史記(10号)、歐米徵兵法、論中國戰船(11号)、太西運輸論、地球圖日成歲序図説、美國誌略(12号)、日本海軍再述、太西運輸論續稿(13号)、亞細亞洲總論、太西文學源流考、火輪船源流考、歐亞比例説、美國誌略續考(14号)、學校、太西

郵制、出版權、法國誌略 (15号)、星學源流、占星辨謬、歐米租制 (16号)、論土路火車、火器新式、法國誌略續考 (17号)、德逸國誌略 (18号)、德逸國誌略續考 (19号)、行星論、侯氏遠鏡論 (20号)、合衆國財政概況 (21号)、太西河防、富國說上 (22号)、論綠氣、恒星動論 (23号)、禁煙說略、論耶蘇教、亞里斯多得里伝 (24号)、治道論、俄國誌略 (26号)、航海說 (27号)、歷覽英國鐵廠記略 (29号)、歷覽英國鐵廠記略續前卷、伊國誌略 (30号)、和蘭誌略 (31号)、美國大統領、地球養民關係 (32号)、禁煙論、地球養民關係續前卷 歐羅巴洲 (33号)、公法說、法國兵備記略 (34号)、歷覽英國鐵廠記略續前卷、日本地租條例 (35号)、覽英國鐵廠記略續前卷、地球養民關係續前卷 亞美利加洲、澳大利亞洲 (36号)

井上角五郎はこれらの記事の企畫や翻譯、編集などに関わったと思われる。なお、井上角五郎は1884年「甲申政変」にも関わり、一時日本に歸るのであるが、政変の1ヶ月後、井上馨外相と共に來韓し、1886年6月25日から『漢城旬報』の記者として活躍する。

4. 『漢城旬報』に受け入れられた日本語

『漢城旬報』の記事の構成は、〈表一1〉で見られるように、国内ニュースと国外ニュース、読み物、本局廣告などで構成されている。これらの記事のうち、国内記事はほとんど「朝報」に頼ったと言われているので、韓國人のスタッフによって作成されたと思われる。国外のニュースの場合も中國の新聞がニュース源になっているものは漢文に堪能であった韓國人記者も記事の作成ができたはずである。ところが、ニュース源を日本の新聞であった記事や出典が日本の資料であろうと推定される読み物類は、日本語が分からない韓國人スタッフによって書かれた可能性は低いと言える。これらの記事はやはり井上角五郎が作成したと見るのが自然であろう。そこで、本発表では、外國のニュースのうち、ニュース源が日本の新聞であるものと、ニュース源は不明であっても記事の内容が日本を扱っているものを調査の対象にした。さらにまた、読み物類も出典が日本語でできた可能性が高いと判断し、調査の対象に入れた

。調査の範囲は1号から36号までの全号である。

(1) 「各國近事」に使われた日本語の語彙

以下、第1号から36号までの中から、当時日本で使われたと思われる語（地名などを含む）を拾ってみると次のようになる。ただし、これらの語は出自が全部日本語であるということではない。この時期使われた漢語の出自は不明なものが多いのでここでは論外にすることにする。

第1号：日本鎖聞 記事3件。 陸軍、海陸軍

第5号：日本鎖聞 記事1件。陸軍省、鉦山東京上野（上海申報より）

第6号：日本小伝（滬報より）、日本鎖聞 計2件 歐州（日本鎖聞）

第7号：日本鎖聞 記事1件 歐州

第8号：東京近報 1件

第9号：徳法不相容（日日新聞記事から） 電信、合衆國、

英民移住海外（時事新報から）（北米）合衆國

英人出償金於日本（時事新報から）： 灯台

美廷廢公權保護律（時事新報から）：公權

米國鐵道（時事新報から）：鐵道

俄國虛無党（時事新報から）：印刷機械、海軍士官、砲兵士官

俄國海軍省布示（日本新聞云）：海軍、海軍省、海軍學校、測量兵、機關兵、艦隊

日本海軍（東京日日新聞から）：陸軍、海軍、砲台、海陸軍噸、馬力、士官、海軍學校、徵兵、

日本鐵道（日本近信云）：鐵道、英里、會社、

日本造幣統計表（日本造幣局報）：造幣、統計

日本軍艦周游地球（日本報云）：海軍、太平洋、大西洋、印度洋

日本水産（東京日日新聞から）：面積、漁場、噸、合衆國、

中國造船廠（日日新聞記事から）：造船所、

第10号：日本更新：なし

第11号：俄國疆域記（日本近信）：英里、

第12号：なし

第13号：割地与俄（日本協會報告）：

電局近聞（日本協會報告）：電報、

日本海軍再述(日本近信)：海軍、陸軍、砲台、英里、軍艦、三菱會社、
共同會社、海軍學校、生徒、海陸軍、艦隊

第14号：廣弁軍火（日本報）：磅、

亞細亞洲總論（金子弥兵衛論說から）：歐州、異邦人、人口、面積

歐亞比例說（日本近信）：歐州、人口、統計、面積、英里、陸軍、常備
兵、海軍、予備兵、

第15号：松材綿（日本近信）：陸軍、兵營、

第16号：英國人數（日本報）：人口、總數、外國人、

英國出版新著書籍（日本報）：出版、教育論、雜誌、法律學、

俄國南下（日日新聞）兵營、軍用、鐵道、

德國海軍（時事新報）：海軍、艦長、大尉、少尉、生徒、軍艦

第17号：英國大砲（日本新聞）：大砲、噸、彈丸、直徑、英里、

美國關稅（報知新聞）：關稅、人口、海關稅、弗、平均、

德國東洋艦隊（報知新聞）：艦隊、口徑、英里、艦上、

砲兵工廠(時事新報)：砲兵工廠、軍艦、職工、

陸軍增額（日本陸軍省）：陸軍、

東京財政（日本東京議會記事）：財政、歲入、予算、歲出、中央政府、

第18号：万国鳥類會（日本官報）：試驗場

保護海運（日本新報）：領事館、海運、海運會社、弗、

第19号：俄國亞陸政略（前據日本報）：下議院、代議士、

日本近聞（日本報）：外國、裁判官、海軍省、關稅、大藏省、銀行、日
本銀行、電信局、

日本地租條例：維新、公立學校、地方稅、地方政府、神社、大藏省

第20号：なし

第21号：錄日本官報朝鮮貿易經緯表：輸出入品、和紙、足袋、石炭、和傘、扇子

、輸入、生菓、樂器、外科器、置時計、掛時計、足袋、紡績器、手袋、

小銃、護謨、大砲、木綿布、直輸入品、洋紙、石鹼、消防器、生金巾、

第22号：なし

第23号：饋贈大砲（日本報）：大砲、大統領、

英國東洋屯兵（日本報）：陸軍、經費、予算、砲兵、士官、大隊、小

隊、殖民地、工兵、歩兵、

東洋艦隊（日本報）：軍艦、合衆國、

第24号：東京近信（申報から）：

日艦命名（中外新報から）：

横浜各邦人數（日本報）：

日本載筆：學校、幾何平面図、幾何立方形図、幾何學、代數、微分、積分、積分方程式、工業、面積計算、音聲學、化學、元素、下水管、工業經營、鐵路、水道、

日本國君勤政（日本約哥哈新聞紙）：人力車

第25号：日本軍医：公使、病院、神經、

日本明治17年歳出之部：經常歳出、國債、内譯、勞働年金、軍人恩給、外務省、内務省、大藏省、陸軍省、海軍省、文部省、農商務省、工部省、司法省、國稅局、土木、神社費、紙幣、合計、

第26号：なし

第27号：日本借銀（申報）：電報、國債、

鐵路利益（申報）：

第28号：日本華族（時事新報）：華族、維新、合計、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵、

日本官員統計表：統計、

日本有位者統計表：

火山發焰：火山、

第29号：美國貨幣鑄造局（時事新報）：硬貨、金貨、銀貨

第30号：英國財政（日本報）：謗、統計、歳入、歳出、海關稅、印紙稅、郵便局、公債、（亞弗肝）戰費、電信局、汽船會社、大藏卿、

第31号：和蘭商業（時事新報）：面積、英里、人口、合計、弗、

法國航業（日本官報）：謗、

俄國鐵道（時事新報）：鐵道、建築費、面積、

第32号：なし

第33号：上海中立（日本紫溟新報）：

日本保護船（報知新聞）：軍艦、

中國陸軍統計表（報知新聞）：陸軍、統計、

第34号：條約諸國政體記略：人口、政治、政體、太政官、太政大臣、立法、行政、司法、三權、內閣、華族、元老院、議長、會議、地方官、大藏省、裁

判、

第35号：日本地租條例（日本報）：維新、公立學校、神社、大藏省、

第36号：日本語學生徒：陸軍省、卒業試験、

日人巡視我國鉦山：造幣局

日本病院：病院

前にも述べたが、これらの語の出自についてはさらに検討する余地がある。

(2) 読み物類に使われた日本語の語彙

『漢城旬報』には、3-(2)の〈表-1〉で見られるように、100以上の読み物類の記事がある。これらの読み物類の記事は、件数だけではなく面数が多いので、全部を調べるとことは時間的に無理であった。なので本稿では、全体の読み物の中から3編の記事をサンプル的に調査し、全体の見通しをつけるのに止まった。調査の結果は以下に示す。

「地球論」(第1号)：面積、千里鏡、太平洋、大西洋、人口、工業、

「學校」(第15号)：學校、小學校、中學校、大學校、農業、工業、商業、洋語、理學、化學、法學、醫學、師範學校、教師、夜學校、官立學校、公立學校、文部省、學制、工業學校、建築學校、鉦山學校、農業學校、獸醫學校、加減乗除、分數

「美國大統領」(第32号)：大統領、共和、民權、自由、獨立國、立法部、行政部、司法部、副統領、西曆、上院議長、月曜、火曜日、選舉、候補、上院、演説

上の結果を見ると、読み物類の記事には、ニュース源が日本の新聞記事よりも、日本語の使用が多いか、あるいはそれ以上であったということが分かる。この調査結果に對し、本発表者は今のところ次のように判断している。

- ・読み物類の元の資料は日本語でできていた。
- ・読み物記事を作成(または翻譯)した人は、井上角五郎であった可能性が高い。

これらについては、今後調査を進めていけば明らかになると思われる。

5. 終わりに

以上、『漢城旬報』の發刊や井上角五郎によって『漢城旬報』に取り入れられたと思われる日本語の語彙について見てみた。今回の調査で、井上角五郎は日本関連の記事を譯したり、作成するとき、『漢城旬報』に日本語の語彙を使ったということが分かった。

印刷が終わった『漢城旬報』は、一番先に國王や「侍講院」(太子が勉強するところ)に送り、次に全國400余りの官署に配布された。一般の人も購讀でき、ソウルでは博聞局から、地方の人は「京邸」(ソウル連絡事務所)へ連絡して購入したという。『漢城旬報』の語彙が当時の韓國語の語彙にどれぐらい影響したかはまだはっきりしないが、國王を始め、高級官吏や知識階層に讀まれたということで、かなりの影響力があったのではないと思われる。このように影響力のある新聞の發刊に日本人が参加し、新聞記事の中に日本の漢語を取り入れたということは非常に興味深く、また驚くべきことである。

今回は時間的な制約などもあり、十分な調査ができなかったが、今後さらに詳しい考察を加え、『漢城旬報』全体に取り入れられた日本語の語彙を明らかにしていきたい。なお、『漢城旬報』の記事とニュースの源のそれとを對照し、本の記事の内容がどういう用語で譯されたかなどについても調査を進めていきたい。

【注】

- 1) 「近代における日韓兩國の接触と受容について」(『國語學』54-3, 國語學會, 2003.7) を参照
- 2) 宋敏 (1988) 「日本修信使의 新」文明語彙 接触『語文學論叢』7(國民大學校語文學研究所)などを参照
- 3) 朴己煥(1998), 「近代初期 韓國人の 日本留學-1881년부터 1884년까지를 중심으로-」『日本學報』40 (韓國日本學會, 1998.5, 233-251)
- 4) 冊子型の体裁は當時の中國の新聞に由来するもので、日本の新聞も同じ体裁をとっているも

のがあった。

5) 上田政昭他編『日本人名大辭典』(講談社、2001)、p215による

6) 資料2を参照

參考文獻

- 姜在彦(1970), 『朝鮮近代史研究』、明石書店
- 金圭煥(1969), 漢城旬報解題、『漢城旬報』影印本
- 김용호(1988), 漢城旬報에 관한 文化的 解釋, 言論文化研究Vol.6 No.-, 西江大學校 言論文化研究所, 255-292
- 김영주(1997), 漢城旬報 - 研究概觀, 爭点 및 性格. 東北亞 6. 東北文化研究院, 1997.
- 朴己煥(1998), 近代初期 韓國人の 日本留學-1881년부터 1884년까지를 중심으로-, 日本學報40, 韓國日本學會, 1998.5, 233-251
- 朴晟來(1983), 漢城旬報와 漢城周報의 近代科學 受容努力, 新聞研究 36. 관훈클럽
- 朴正圭(1983), 漢城旬報와 朝報에 관한 研究, 新聞學報 16, 韓國新聞學會
- 白鐘基(1983), 『韓國近代史研究』, 博英社
- 宋敏著 管野裕臣他譯(1999), 『韓國語と日本語のあいだ』、草風館
- 宋敏(1988), 「日本修信使の 新文明語彙接觸」『語文學論叢』7、國民語文學研究所
- 安春根(1984), 雜誌媒体로서의 漢城旬報, 言論研究論集 2. 中央大學校 新聞放送大學院
- 俞東潛(1987), 『俞吉潛伝』, 一潮閣
- 李光麟(1985), 『韓國開化史研究』、一潮閣
- 田鳳德(1978), 「朴泳孝와 그의 上疏 研究 序說」『東洋學』8.
- 鄭大撤(1984), 漢城旬報, 周報의 開化方向에 관한 考察, 韓國學論集Vol.5 No.1, 漢陽大學校韓國學研究所, 93-126
- (1986), 開化期 新聞의 新聞論에 관한 考察, 韓國學論集Vol.10 No.1, 漢陽大學校 韓國學研究所, 135-166
- 鄭晉錫(1983), 漢城旬報와 周報의 뉴스源, 韓國言論學報, Vol.16 No.1, 韓國言論學會, 11-21
- 鄭晉錫(1983), 漢城旬報 周報에 관한 研究. 新聞研究 36. 관훈클럽
- (1984), 최초의 近代新聞 漢城旬報>, 言論研究論集 2. 中央大學校 新聞放送大學院, 1984.
- 崔俊(1983), 「漢城旬報」의 史的 意味 - 韓國新聞 100周年을 맞이하면서, 新聞研究 36. 관훈클럽
- (1969), 「漢城旬報」의 뉴스源에 대하여, 韓國言論學報, Vol.2 No.1, 韓國言論學會, 12-20

青木功一(1969),「朝鮮開化思想と福澤諭吉の著作」『朝鮮學報』52, 朝鮮學會

資料1 : <戦前韓国去留日本人の數>

年次	日本人の數	韓国の總人口に對する%
1876(M 9)	54	-
1884(M17)	4,356	-
1894(M27)	9,354	-
1904(M37)	31,093	-
1906(M39)	83,315	-
1910(M43)	171,543	1.29
1911(M44)	210,989	1.50
1912(T 1)	243,729	1.64
1913(T 2)	271,591	1.76
1914(T 3)	291,217	1.83
1915(T 4)	303,659	1.87
1916(T 5)	320,938	1.93
1917(T 6)	332,456	1.96
1918(T 7)	336,872	1.97
1919(T 8)	346,619	2.02
1920(T 9)	347,850	2.01
1921(T10)	367,618	2.11
1922(T11)	386,493	2.19
1923(T12)	403,011	2.25
1924(T13)	411,595	2.28
1925(T14)	424,740	2.23
1926(S 1)	442,326	2.32
1927(S 2)	454,881	2.38
1928(S 3)	469,043	2.44
1929(S 4)	488,478	2.53
1930(S 5)	501,867	2.48
1931(S 6)	514,666	2.54
1932(S 7)	523,452	2.54
1933(S 8)	543,104	2.61
1934(S 9)	561,384	2.66
1935(S10)	583,428	2.67
1936(S11)	608,989	2.76
1937(S12)	629,512	2.82
1938(S13)	633,320	2.80
1939(S14)	650,104	2.65
1943(S17)	752,823	2.86

(梶村秀樹、「朝鮮史と日本人」(梶村秀樹著作集第一巻)、明石書店、1992、p225による、軍人は含まれていない)

근대이후의 일한어휘 교류

이 한 섭

본고는 근대 이후 한국어와 일본어의 교류를 다룬 것이다. 지금까지 19세기말 한국어와 일본어의 교류를 논할 때에는 한국인에 의한 일본어의 도입문제가 주로 연구되었는데 본고에서는 일본인이 한국에 와서 직접 일본어 어휘를 전달한 예를 다루었다. 본고에서는 漢城旬報의 발행에 관여한 이노우에 가쿠고로(井上角五郎)의 예를 들어 당시 한국에 초빙된 일본인 顧問이 일본어를 한국어에 어떻게 도입하였는가를 고찰하였다. 고찰 결과 이노우에는 漢城旬報의 기자로 참여하여 기사를 작성함에 있어서 신문 기사 속에 일본어를 도입한 것이 적지 않음이 확인되었다. 漢城旬報의 기사는 국내기사와 국외 기사로 나눌 수 있는데 이노우에가 기사 작성에 관여한 부분은 국외기사이고 그 중에서도 특히 일본신문 기사를 취재원으로 삼은 기사 속에 일본어 도입이 많았음을 알 수 있었다. 그리고 漢城旬報에는 계몽성 기사가 적지 않은데, 이 부분의 기사 작성에도 일본어 도입이 많아 이노우에가 관여한 것으로 추정할 수 있었다.